



## 伝えておくれ 十二月の旅人よ

風に舞った花びらが水面を乱すように、気が付けば、誰もかれも旅立って去り、思い出を肴に独酌。月影を友に、歳時記を枕に。

「あのB君、また来るの?」。彼は私より十七歳若い五十五歳です。最初の一言が「大学で教えています」ときたものだ。「社会学ですか」。こちらの好奇心は無視され、私大の非常勤講師で、週三日で六コマ、予備校で週二日。「非常勤講師が増えているんですよ。国からの交付金の減額、少子化による大学生の減少が背景にあります。修士号、博士号を持っている多くの仲間たちがわずかなポストを争っているんですよ。非常勤は何かと立場が弱い。契約はほとんどが一年更新だから、不安です。雇い止めって知っていますか」。B君はちよつとうざったいが、社会学の方法で過ぎ去った時間の社会を整理して話をします。

一九五五〜七三年は、一言で言うところの経済の高度成長期でしょう。ポイントは、「自由の拡大と確実性」、「経済成長と格差縮小」という、本来矛盾する概念が両立していた非常に幸福

な時期でした。これから社会に参入する若い人々が、安心して生活でき、希望がもてた歴史時間でした。社会学の用語で整理すると、職場エリアでは、「企業の男性雇用の安定と収入増加」、家族エリアでは、「主婦型家族の安定と生活水準の向上」、そして教育領域においては、「学校教育の現場振り分け機能の成功と学歴上昇」です。すなわち、みなさんご多忙でも、人々に希望をもたらしていた空間でしたね。

「能弁だけど、B君ピッチが速いのでは?」「ビールだから大丈夫だろう」。この時期は空前絶後の低失業率を記録したのですよ。1%です。男性でまじめに働く意思さえあれば、必ず仕事は見つかったのです。ポイントは(年功序列・終身雇用・企業内労組・社内福祉)です。……こちらは頭がボーツとし始めるが、話は続く。夫がサラリーマンとして働き、妻が専業主婦であること。このタイプの家族は、現役で働いている夫が亡くなれば、生活困難に陥ります。ここに生命保険が登場するのです。いいですか、一九六八年(あれ、昭和四三年、俺は十六歳、都立忍岡高校の二年生だった)の世帯加入率八十九%にまで達したのですよ。また、健康保険、年金制度などの社会保険制度も、このタイプの家族を前提として整備されたのです。夫に先立

たれた後のリスクカバーが遺族厚生年金制度です(俺は女房よりも先に逝く。もちろんその方がよい……)。

つまり簡単にまとめると、職業、家族、教育の領域は、ローリスクで安定しているだけでなく、「生長」していたのが高度経済成長の時代なのです。つまり特別なことをしなくても、リスクを冒さなくても、生活が豊かになったのです。それが「格差」からくる心理的不満を和らげる効果をもっていたのです。「格差」はスタートラインの差、到達点の差、時間差、スピード差であり、「実質的な差」とは考えられていなかったのです。ここに多くの日本人が包み込まれた空気が「中流意識」なのです。みんな一緒に豊かな生活を築くことができたという点が重要なのです。リスクの普遍化、リスクの個人化が出現するのは一九九〇年代からです。

「B君には日本酒を吞ますなよ」とささやくが、こちらが呑んでいるのに、僕も日本酒と言われて拒否はできません。しようがない、こちらにもヤポンスキーサク。「鮭?」と吉右衛門のマスター。「すなわち、世代論になりますか、●●さん、粕谷さん、あなたたちの世代こそ、戦後にいちばん恵まれていた時代に生きていたのです」。この野郎、まだ生きていますぞ!

「愛子さまを次期天皇さまに」。●●も酔っぱらっています。ああ、疲れました。B君は帰りました。

男版負け犬の遠吠えだな。まあまあ、そう怒るなよ。やっぱり自分にとって、いちばん気が楽なのは女房かな。何もかもあなたがいなければ、一から十までひとりと言っているからな、可愛いもんだぜ。いや、人生は、毎日毎日が、LONELY・PLAYですよ。

たしかに社会学で整頓されると、頭ではそう考えようとしますが、心は「みんな苦労してきた」と叫んでいます。七十歳の坂を超えても何もわかっていないのです（小生だけか）。釈然としません。人生の旅の途中とかっこよく言っても、何だかコンニャクみたいで。残り時間は少ないぞ」と友人たちから注意されますが、何だかまだまだ生きられる気がします（やはりお目出たいですか）。生命体の感覚とはそういうものかもしれません。「人体……なぜ生まれ死ぬその日までなぜ無意識に動き続けられるのか」（人体大全）

娑婆で生きていく中で、人を説得するには、

二言あれば足りる。「御尤も」と御覧の通り。他人の主張には反対せずに、聞き終えると「御尤も」。自分のことは弁解せずに、「御覧の通り」。いやだね、また小林秀雄かよ。手も足も出ないじゃないか。

愚妻が切り取った「朝の歌」。岩手県二戸市の小松遊平さん、七十一歳。「わたしたちと同一世代よ」

結婚当初

あなたは天女に思えた

あれから三十年

エンマ様だったと思っ

さらに十年

あなたは観音様だった

と気づいた

「遊平さん、本名かよ？」

遠来のような言葉が繰り返し耳の奥でかすかに鳴り響くこのころです。

伝えておくれ

十二月の旅人よ

いついつまでも……

次に来る言葉は何だっけ？ 残り少ない時間と今まで生きてきた長い時間が鳴門の渦潮になります。これは予感ですが、歳をとってやさしくなることが、幸せへの近道かもしれません。豊かな人間関係こそが、晩年を幸せにするのだという予感。

幸福……幸福……人偏をつけるべきか。

